



ノスタルジアの音楽
女学生への系譜*11
 富士川義之 8

『森』 近代型女人の神話の時代——その一
 本田和子 14

フェリー島の妖精たち
 白石かずこ 22

アイスフォール
 佐々木幹郎 26

歩哨
 生田梨乃 30

芸術とスキヤンダル
うわさの遠近法*9
 松山 巖 42

ファシズムを生きた人々*19
19世紀パリ——銅版画のイコノロジー
 田之倉稔 64

屍体公示所のキリスト
シャルル・メリヨン 覚書
 気谷 誠 32

ギンター・グラスの半生
詩人および画家として
 飯吉光夫 52

『ラフの名前』から『ブーコーの振り子』へ
エーコ最新インタビュー
 谷口 勇 236

『ブーコーの振り子』とその反響
 谷口 勇 248

『悪魔の詩』の全貌
★悪魔の詩はいかなる小説か？
★政治・宗教 文学
 五十嵐一 87

鯨の外で
政治と文学について
 ラシュディ 川口喬一 訳 118

ルシュディは祖国の裏切者か？
★イギリスにおける『悪魔の詩』の波紋
ルシュディとサイド
 杉田英明 132

『悪魔の詩』と身近な波紋
★イスラムにおける『悪魔の詩』の波紋
ロンドンからの手紙
 大熊 栄 74

小説『悪魔の詩』事件
★インドにおける『悪魔の詩』
イスラムを国際化する
 五十嵐一 146

幻想としての異文化理解
★英文学史におけるラシュディの位置
 高橋 明 157

同時代のイギリス小説とラシュディ
 高橋和久 198

『悪魔の詩』をめぐる反響瞥見
★ギンター・グラスとラシュディ
 稲賀繁美 172

ギンター・グラス論
★ラシュディの著作
 ラシュディ 川口喬一 訳 110

ラシュディについて
 G・グラス 飯吉光夫 訳 116

ラシュディの処女作
『ライマス』
『ダイジェスト』
 星倉憂愁 164

終末のイメージと円環構造
『恥』の構造
 栗原行雄 208

サルマン・ラシュディの二カラグラ
 山崎カヲル 140

短篇『預言者の髪の毛』
梗概
 寺門泰彦 206

評伝サルマン・ラシュディ
★評伝
 寺門泰彦 217

特集 『悪魔の詩』の波紋

ラシュディは有罪か？

ユリイカ 1989年11月号目次





「悪魔の詩」
イラン「報奨金与える」と発表

著者処刑なら4億円
イラン「報奨金与える」と発表

「悪魔の詩」の著者サルマーン・ルシュディは、イランの革命政権に批判的な言論で知られる。その著書『悪魔の詩』がイランで出版されたことに対し、イラン政府は著者に4億円の報奨金を提供すると発表した。ルシュディはこれに激怒し、イランを去った。この報奨金提供は、イラン政府が著者の言論を支持しているように見られるが、実際には著者の言論を封鎖しようとする手段の一つと見られる。

『毎日新聞』2月16日付より。
ホメイニの処刑命令が世界中で報じられる。一方、テヘランでは『悪魔の詩』抗議のデモが……

特集II 『悪魔の詩』の波紋

『悪魔の詩篇』をめぐる反響瞥見

稲賀繁美

「私は真理を追う人のためなら喜んで命を渡そう。だが真理をみいだしたなぞと思っている人を、私は喜んで殺すだろう。」
(カルロス・フエンテスの伝えるルイス・ブニエルの言葉)

虚実の距離

サルマーン・ルシュディは自分の蒙ることとなる運命を予見していたのだろうか。『悪魔の詩篇』にはサルマーンという名前の書記が登場するが、彼は預言者(?)マハウンドが唱える神の言葉をやがとたがえて筆記するにたざら者で、ことが発覚すると自称預言者からこう宣告される。「汝の冒瀆は許されるものではない」と。結局、小説登場人物のサルマーンはアッラーの寛容な慈悲に恵まれ、死罪をまぬがれる。だが周知のとおり、小説

家サルマーンには同じ寛容を期待することは許されなかった。

ところが、ルシュディ氏自身、現実が創作の世界ほど楽観的ではないのを悟っていた節がある。そのことは、一九八四年に公表された「鯨の外で」と題された彼のエッセーからも推察できる。「鯨の外」に出てしまえば、そこは絶え間ない口論や、歴史という弁証法が渦巻いてやまぬ嵐であって、われわれはそこではいわば歴史や政治といったものに「被爆」してしまった放射線被害者なのであり、作家と言う存在も、自らこの嵐の大洋をかたちづくる群衆の一人たる境涯を受け入れるほかないのだ、とルシュディは書いている。そこには「隠れ場所もなければ、安全を保障してくれるものもない」というのが、著者のいわば覚悟だったのである。そして「鯨の外にでた」ルシュディの

うえに、嵐は来るべくして来た。

パロディと冒瀆

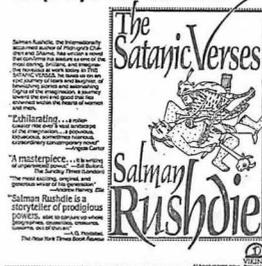
言うまでもなく、「啓示宗教」という「鯨」に対して、著者サルマーンは、あからさまな懐疑をいだいている。小説中の人物サルマーンの言動をみただけでも、そこに著者自身の分身をなにかしか認めることもできようが、そのサルマーンに死刑を言い渡したマハウンドからしてが、大天使(?)ギブレルのお告げを事前勝手に捏造・濫用・改竄する偽(?)預言者という設定である。ところがその預言者面、果してパラノイアックな妄想のなせる技なのか、それとも確信犯を決め込んでいるのか、はたまたこれらすべてが夢のなかの出来事なのか。偶数章と奇数章の合わせ鏡の趣向に幻惑されて、聖俗・善悪・是非は交互に相手方を揶揄し骨抜きにして、「かくもあり、かくもなし」全て

は混沌としてくる。こうした劇中劇で、自らの主張を幾重もの虚実入り乱れた万華鏡の様な織物に縫い込んでしまふ著者の手法は、一方で著者の懐疑を表明すると同時に、他方ではそれを隠蔽する両義的な機能をも果してゆく。著者の本心のありかをごまかす輻晦ぶりが、揶揄の毒舌をなお一層辛辣なものにする、という一石二鳥の戦術である。

だがこうして、人間主義的な「世俗の視点から宗教と啓示について書く」ために、虚構に訴えるという「合法的」(ルシュディ)な姿勢が、大預言者のパロディを描く冒瀆と映り、信者たちの反感を買った。イスラームの法感覚からいって、公正な正当防衛は評価されるが「言葉」をもて遊ぶ事は、神をもて遊ぶ濫用に通ずる。イスラームの信仰の基礎が、神自身の言葉である聖典に依拠するからである。その神の言葉の権威を疑問に付すルシュディの趣向は、あまりにも挑発的で、それが首尾一貫せぬ茶番であるだけに、なおさら卑劣で陰湿な中傷と映り、ひろく義憤を買ったものようである。

そもそも預言者が過去の歴史的存在というよりは、現在の信仰生活に生きづいてイスラームにあっては、預言者やその家族を取すかしめられると、自分の家族の恥部を晒しものにされるような苦痛を覚えるものだという。自分の親族たちが、それと判る変名で登場し、破廉恥な振舞いに及ぶとすれば、これが名誉毀損でなくて何であらう。フィクション仕立ては透け透けのヴェールにすぎず、そんな見えすいた変装を盾に、自己正当化を図るのは、姑息な弁解であり、問題のすりかえに過ぎぬ、

"An Arabian nights entertainment...Rushdie's ambitions are huge, and his creativity triumphantly matches them."



『ニューヨーク・タイムス・ブック・レビュー』紙
2月12日号に掲載された広告。

というわけだ。だがイスラームを生きているわけでない西欧の読者には、そうした揶揄の意図は見取れず、小説は完全な虚構として享受される。イスラーム信徒たちがなぜかくも激しく「純粹のファンタジー」に義憤をいだくのかと、西欧は訝しがったが、その当惑ぶりがイスラーム教徒にはさらなる侮辱と映る、という悪循環もあった。

暴動の発生

既にインドでは昨年暮れの出版直後に発売禁止措置がとられた。禁令の背景には、ウツタル・プラデッシュの聖地での祭礼の期日が重なったため、ヒンドゥーとイスラームの間で宗教的暴動の発生が懸念されていたという状況があった。暴動を回避するための妥協策として、反対派イスラーム系代議士シード・シヤハブッティンが圧力をかけ、祭礼の期日を延期する交換条件として、『悪魔の詩篇』発売を要求した。本書はその扱いいかんによっては、政情の攪乱に利用され社会不安をも惹起しかねない。総選挙をひかえて一億のイスラーム人口を敵にまわしては政局の維持もおぼつかないラジフ・ガンジー首相としては、出版禁止のほかに方策とあり得なかつた。「作品は政治事の手玉にとられた」(ルシュディ)のである。

ルシュディはこの緊急措置を「文明社会にありうべからざる」逸脱として抗議したが、シヤハブッティンはこれに答えてこう反論する。だんな様がたの国で最高の文学賞を獲得、いや失礼取り損ねた小説を、イギリスすれしたインテリたちはひたしとして、むしろ整然たる合法的抗議であつたこの象徴的焚書は、しかし遠からず、宗教的不寛容の、コントロール不可能な爆発を引き起こすこととなる。

政治的スケイプ・ゴートか暴動教唆か

そもそもインド亜大陸において、こと宗教に関する限り、いかに容易に大量殺戮が発生するか、ルシュディ自身前作につぶさに描いていたし、自らも、「もしパキスタンにとどまっていれば、自分はとうに死んでいるところだ」とも漏らしている。『悪魔の詩篇』がかの地でどれほど危険な存在となるかに、作者が無頓着であつたはずはない。とすると、禁書にしなければ暴動が発生するぞと予告するのは、はたして純粹に脅迫の戦術にすぎないのだからか。作家は世論操作と宗教的プロパガンダに利用された単なる被害者でしかないのか。それとも、彼はみずからもはや戻り住むこともないと覚悟した故郷に、意図的な遠隔操作を加えて火だねを蒔き、所期の混乱を出来せしめた加害者なのか。

故郷を捨てたエリート・インテリたちは、祖国ではしばしば、白人植民地主義者の手先である「売国奴」のレッテルを貼られる。イスラーム出身の作家たちは、祖国の宗教を貶めたり茶化したりすることで、西欧の文学賞を授賞する最短コースに乗り、ひたすら西欧の読者におもねることで優雅な生活を送っていると思ひこまれる。そして自分たちを理解できない文盲の民に対する失望と屈曲した優越感が、「亡命」エリートたちの

すら賞賛するが、その内容たるや、聖俗の区別を忘れはたた西欧文明の末路をまざまざと見せつけるものではないか。悪貨が良貨を駆逐する西欧の市場原理におもねる宗教的ボルノグラフィーナぞ読むだけ損であつて、そうした文学的植民地主義の攻勢を前にしてインド民衆が蜂起するのは当然である。全国民の尊厳を託された政府が、かかるまっとうな怒りの矢表てに立たされる愚を未然に回避する自制の精神こそ、文明の作法というものではないか。うんぬん(『タイムズ・オヴ・インディア』紙一九八八年十月一三日)。

つづいて、イギリスはマンチェスター近郊のポルトン(八八年二月二日)およびブラッドフォード(八九年一月一四日)で、ルシュディの本が焚書に付される。本書の出版が、インド亜大陸出身のイスラーム移民の多い地域で抗議の対象となつた背景には、イスラームに対する地元の反感や偏見に便乗したような揶揄が、本書に溢れていたことがある。おまけにそのようなイスラーム侮蔑が、イスラーム出身で、英国籍を取得した著者の手で公然と行われたのだから、八五万人と言われるイスラーム教徒移民の多くが、感情を害し、「冒瀆」されたと感じたとしても不思議でない。自分たちにたいする「裏切り」がそのままイスラーム冒瀆と二重写しになつた。そして、その冒瀆の背後に控えているのは、著者のかぶれた西欧文明である。逆に言えば、この本は、社会差別の被害者意識を持つイスラーム教徒たちの不満に、はけ口を提供することとなつたわけである。それ自体

内部に知らぬ間に独善性と偽善性とを養って行く。そこに強烈なまでに臭うのは相互不信と相互憎悪の悪循環である。

二月一二日パキスタンのイスラマバードで発生した反ルシュディ暴動は、ついに六人の死亡者を出した。この際攻撃目標となつたのは、一見無関係なアメリカ文化センターであつた。西欧派ブット政権に揺さぶりをかけようとするイスラーム原理派が仕組んだことだと言われるが、彼らにとつて、この事件は、あくまで西欧民主主義によるイスラーム「侵略」の一環として演出される必要があつたわけである。亡命者ルシュディはその「国際的陰謀」の手先でなければならぬ道理である。

先のガンジー首相あての公開書簡で、ルシュディは出版禁止に反発し、これではまるで無罪の者が強盗どもの攻撃にさらされるおそれがあるからというので、その人物を投獄するに等しいではないか、と述べていた。そしてこの言葉はまもなく現実となる。彼の小説が国境を越えて発揮した影響力が、いまや再び国境を越えて、作者本人の上に跳ね返り、作者に地下潜行を強いようとしていたからである。

II イスラマバードの暴動

イスラマバードの暴動に刺激されたものか、ようやく二月一四日になって、イランの宗教指導者アヤトラ・ホメイニがルシュディおよびその出版者の「死刑宣告」を発し、周知のように、

うわけである。

ヨーロッパの世俗化された社会では、宗教は個人のプライベートな領域に限定されるが、そもそもイスラームにとって、信仰は人生の一部ではなく、人生が信仰の一部であるにすぎない。生命を賭けるに値する信仰を前にすれば、現世の尺度での自由など考慮するに値しない。ところで、ルシュディの棄教は世俗の尺度では国家反逆罪に相当するだろうが、それは彼は信仰共同体に対して犯したのだから、その罪の重さは比較にならない、という理屈である(イナヤトトラ・ザイガム、『インディペンデント』紙二月一七日)。

天上と下界と

シーア派の場合、イマームの宗教的権威からくだされた裁定は、『クルアーン』の秘密を開示するものとして、イスラーム教徒の信仰生活にとって、そのまま法的効力を発揮する。ホメイニの発言は、宗教権威者として(イマームを僭称したい)自分の正統性を主張すること、いわば背中合わせの不可避の選択であった。死刑を宣告することなしには、その宗教的権威が疑われかねない状況があったわけである。さもなくば、信者ならば誰でも知っている常識を、いまさら公式の場所で蒸し返す必要などなかったはずである。

むしろ問題は、神の名前による「死刑宣告」が、地上における「暗殺命令」として妥当するか否かにある。イスラームの出であるルシュディも自分が神の罰をうけることは覚悟していた

ではほぼ統一されたイスラーム界も、具体的な刑罰の認定、適用、執行については意見が分かれた。そもそもルシュディによる謝罪を認めるか否か、および殺害懸賞金の道義的是非については、イラン国内でも見解に相違をきたした。謝罪すれば罪の許される可能性もあったと、二月一七日のホメイニ大統領の演説が、二日後アヤトラ・ホメイニによって否定されたことから推測されたように、「死刑宣告」は、国内権力抗争での劣勢を対外的冒険によって挽回し、あわせて国内極派を制御しようとする、いつもながらの、世論操作の切札だった。「危機」を演出しなければ革命の延命はなかったのである。

新聞記事のスクリーンショット。上部には「悔い改めて死刑撤回せぬ」という見出しがあり、ホメイニの演説に関する写真とテキストが掲載されている。下部には「第六戒の言葉 公に唱えさせよ」という見出しがあり、ホメイニの肖像と説教の要旨が紹介されている。

『朝日新聞』2月20日付より。ホメイニ、ホメイニ大統領の示唆した死刑撤回の可能性を否定。

Handwritten notes in the right margin, including the phrase "信仰の自由" (Freedom of Faith) and other illegible characters.

はずだ(それは「鯨の外に在る」とほとんど同義である)が、この世でその執行が命ぜられるとは思っていなかったらう。だが、刑罰の執行は神の手にあくまでも委ねるべきだとする見解もある。神が大天使を派遣して罪人を裁くことはないから、地上にいる者がその勤めを果たさねばならぬ、とする意見もある。その是非についての神学的解釈の詳細には立ち入らない。イスラーム内部に論争の発生したこと、そしてそれが真正正銘の宗教的暗殺を、ベルギーで三月二十九日に惹起せしめたことを確認するにとどめよう。

ただ、ひとつ注意しておきたいのは、アヤトラ・ホメイニの判断を宗教と政治の悪しき混同であると認定する者は、そのままイランのイスラーム革命の原理たる神権政治をも否定する者となる、ということである。ホメイニの判断を認めない者は、同時に彼の宗教的権威をも認めない者となる。ここには原理的に妥協などありえない。ホメイニはまことにたくみな踏み絵を発明したと言っ他ない。民衆のレヴェルで、「ホメイニ師だけがまことのイスラームの守護者だ」といった反応が起こり、レパノンをはじめとする「過激派」諸集団がすぐにもアヤトラの呼掛けに応答したのに対し、多数派のスニ派からは宗教裁判や情状酌量の必要が指摘された由縁である(イスラーム内部の諸反応は、二月三日発行の『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』に詳しい)。

政治的意図

ルシュディは宗教的冒瀆を犯した棄教者である、とする認識

実際の効果はまったく疑問視するほかなく、シーア派内部でもその法的正当性が疑問視され、またむしろ秘密裡に暗殺部隊でも派遣して、所期の成果を収めてから犯行声明に及んだ方がはるかに現実的であったはずの、こうした「死刑宣告」を、あえてホメイニが公にしたのにあたっては、イラン国内の政治的覇権争いへの顧慮のほか、イスラーム原理主義勢力の精神的・政治的盛り返しの意図や、さらには西欧との断絶をことさらに促進しようとするイデオロギー的な意図等のあったことは疑いない。果して二月二四日には、ルシュディの生地ボンベイで、死亡者一二人、逮捕者五百人以上、検挙者八百人以上という、単独の暴動としては最大の事件が発生するが、これもイスラーム原理派と警官隊との衝突であった。また三月四日カラチ空港で数千人が略奪をはたらいた暴動も、親イラン派のシーア派指導者サジャド・アリ・ナクヴィイの帰国を歓迎した折りに発生したものであった。この間、身をひそめる直前のルシュディはインタヴューに応じ、暴動の犠牲者たちに共感など覚えないと発言した。無知で蒙昧とはいえず『悪魔の詩篇』がきっかけで命を落した人たちにたいして、これではあまりにぞんざいだ、と、イスラーム作家、モナヌール・ハクが痛切な落胆を表明している(『インターナショナル・ヘラルド・トリビューン』二月二四日)。

地政学的背景

では、暴動の舞台がインドやパキスタン、さらにはそこから

Handwritten notes at the bottom of the page, including the phrase "死罪" (Capital Crime) and other illegible characters.

の移民の多い英国となったのは、なぜか。注目すべきは、この地域がスンニ派イスラームと、シーア派の両派にわたるイスラーム原理運動が指導権争いを続けている、いわば勢力範囲未劃定地帯であることだ。二度にわたり、サウジ・アラビアの転覆とメッカ奪回に失敗し、イラクとの八年にわたる戦争にも勝利を収めなかつたホメイニにとって、『悪魔の詩篇』をめぐるいざこざは、いわば唯一可能な政治地理学的転進であった。となれば、ルシュディ事件の背後にみえてくるのは、ホメイニの、サウジ・アラビアとの覇権争いということになる。

イランがこれらの「暴動」を「イスラーム革命運動の世界的成果」と評価したのに対し、「死刑宣言」は「国際的テロリズム」であると規定して批判した西欧側の反応は、はからずもホメイニのメディア戦略の有効性を裏書きする結果となった。イスラーム革命の精神的指導者の威信を全イスラーム世界に誇示するための最良のプロパガンダとは、西欧からの非難を一身に浴びることにあつたからである。

レバノンの親イラン派原理主義者ムハンマド・フサイン・フアドルッラーは、慎重に言葉を選び、ホメイニの「死刑宣言」は、いくつかの出版社や政府に影響を与えて、出版の自粛や禁止を取り付けたが、それだけで、所期の目的を十分に達したという。「本質的には判決が著者に対して執行されたか否かにはない」(『リベラシオン』紙二月三日)。この発言は以下の二点で考察に値する。まず、ここにはホメイニの「死刑宣言」は字義

通りでなく、レトリックであつたというニュアンスがあるが、ルシュディの本が字義通りでなくレトリックであることを認めようとしなが、彼の小説を弾劾する人々であるからには、この矛盾ないし片務性は高度に戦術的である。

第二点として、ホメイニの宣言が、国際法に抵触し、かつ外国の国内法に間接的だが超法規的な拘束力をおよぼした点を評価するがゆえに、この見解はあらためて、ルシュディ事件の問題所在を確認させてくれる。世俗界と宗教界との役割分担に矛盾をきたす間隙があり、それを外交上の係争点として浮かびあがらせたのが、ルシュディという二重のアイデンティティの持ち主だったのである。

「植民地の遺産ともいえる男が、その鬱屈した優秀な頭脳で、凋落した英国と擡頭拡大するイスラームに苛立つ人々と、エスノ・ポップスの流行にも見られるような若い世代の東方志向を読み取って、商業的な成功を計り、同時に、イスラーム原理主義者達の怒りとアラブ諸国の政治がらみの困惑まで見越して放つたベストセラー作りが、『悪魔の詩』だった」(甲斐大策、『東京新聞』四月二日夕刊)。

宗教的平安や民主社会下にぬくぬくと温存されてきたひとりが、よがりな自己満足の正体を、むりやり両者を擦り合わせる事でもって、遠慮会釈なく洗い出した作者は、文化間の翻訳や流通が、普段偽りの円滑さの下で隠蔽してきた不都合や不合理そして誤解を、白日のもとに晒すというその功績によって、まさしく糾弾されたのである。

預言の書としての『悪魔の詩篇』

知ってか知らずか、ルシュディは、その「魔術的リアリズム」によって、ちやうど「魔法使いの弟子」よろしく、自分では收拾のつかない大騒動を引き起こした、ということになる。この迷宮のような小説の奥底には、作家自身あざかり知らぬ、ミノタウロスが潜んでもいたのだからか。作家本人は、たかが一冊の小説でイスラームのような大宗教の屋台骨が揺らぐだろうかと、と居直つてみせたが、彼は体よく、宗教的熱狂をかき立てるための手段ないし口実として利用されてしまったわけである。この本はおそらく預言者を弾劾した本と言うよりも、権力の濫用を弾劾した本といえるだろうが、その本がまたしても権力によって、ものの見事に濫用され、著者自身がその標的にされたのは皮肉である。預言者はその里では受け入れられぬというが、迫害にさらされたことで、ルシュディは自分の著書がまことに預言の書であつたことを、はからずも身をもって実証してしまつた。

だが、ハロルド・ブルームも言うように、宗教が芸術を先導し、聖典が文学的想像力の糧となる先行形態であるならば、ルシュディは「神の絶対という空虚」を想像力で埋め合わすことによって、ホメイニよりもさらに徹底して破壊的な、イスラームの革命者となつた、とも考えられる。それが彼の首に六百万ドル相当の懸賞を掛けることとなつた理由だとする、ジャック・マイルズの穿つた見解もある(『ロサンジェルス・タイムズ』二月二六日)。

III 諸国の反応

いずれにせよ、二月二二日に予定されていたアメリカ合衆国での『悪魔の詩篇』発売を見越して宣言されたかのような、ホメイニの「死刑宣言」によって、事態はいっきに、イランのイスラーム原理主義対西欧近代の言論の自由という、イデオロギイの対立へと変貌—ないし偏向—していった。

諸国の反応

まず二月二〇日、ブリュッセルの欧州共同体—二カ国外相会議はその共同声明において、イランによるルシュディ「殺害の扇動は、主権国家間を司る最も基本的な原則および義務を犯すものであつて、到底容認されるものではない」と非難した。一—二カ国がすぐさま歩調を揃えて外交措置をとつたことは、もとより西欧との関係修復など望んでいないホメイニ師周辺の強硬派に「西欧による反イスラーム革命の陰謀説を裏付ける格好の「証拠」を提供した。「これはあらたに共謀された、傲慢と全面的な冒瀆のしるしである」(三月二八日までアヤトラ・ホメイニの指名後継者だつたアヤトラ・モンタゼリの二月二五日の発言)。このいささかバラノイアックな短絡も、イランを困む迫害妄想的な国際環境を反映しつつ強化する、一種の循環系をなしているが、この回路の成立によって問題がすり替えられたのを見落としてはなるまい。パーミンガムのイスラーム・センター長、アブドゥル・ラーヒムも言うように、事態が国際政治の舞台へと移

動したことで、イスラーム教徒に対する侮辱の問題は置き去りにされ、人々の関心はもっぱら対イラン報復一色に塗りつぶされたからである(『インディペンデント』紙二月二三日)。

ところで、この欧州共同体の共同声明の音頭をとったのは、イラン・イラク戦争終結の陰の立て役者、ドイツ連邦共和国のディートリッヒ・ゲンシャー外相であったというが、ドイツがイラン経済復興の西側最大の契約国である以上、この表面上の強硬姿勢のうらには、経済協力の将来展望についてのしたたかな読みがあったはずである(実際、一月後には、欧州共同体は「恥を知って」(ホメイニ師)形式的な「凍結」措置を解き、テヘランに大使を派遣しなおすこととなる。蛇足だが、イラン最大の貿易相手国である日本の国際感覚欠如と日和見主義の対応には、あきれられるのを通り越して背筋が寒くなる)。

一方、アメリカ合衆国では二日にブッシュ大統領が、ルシユデイの「本がいかに侮辱的なものであるにせよ、だからといって殺人を教唆したり、その犯行に賞金を提供したりするのは、文明化された行動の規範を踏みこむものである」と演説。翌二日、フランス共和国大統領、フランス・ミッテランも正面からの原則論をぶつ。「およそ暴力によって精神の自由と表現の権利を犯すとき教条主義は、私にとっては絶対の悪である」「あらゆる狂信が後退するに伴って、人類は精神的、霊的に発展する」。



『東京新聞』2月20日付より、各国の死刑宣告の反響を報じる。

他方イスラーム側も、公式に「死刑執行」に同意したのは、イランおよびそれと密接な関係をもつ、占領下のパレスティナ解放機構などの少数派にとどまった。例えば、三月一三日からリヤドに集ったイスラーム外相会議が三月一六日に発した声明は、イランの処刑宣言は拒絶するが、小説の出版停止と回収がなされない限り、加盟国内部での販売はボイコットする、という線に落ち着いた。イランと欧州共同体との両極端の間に、国際法に抵触しない妥協点をみいだそうとする限りにおいて、この宣言は、論争そのものを解消するような新たな土俵を提案する性質のものではなかった。

だが、ここで超法規的な宗教上の暗殺を一応論外としたために、かえってイスラーム世界と西欧世界との意見の隔たりが、別の面ではつきりしてきた。それは、イスラーム教国がほぼ全面的にルシユデイの『悪魔の詩篇』を発禁処分に処したのに対し、カナダを除く「自由主義圏」では、保安上の詮議はとにかくとして、主義主張のうえでは、「言論の自由」の名の下に、結局出版を断行する大勢に傾いたという事態である。

抗議行動

言論の自由に関して西欧側の反応の基本線を示すのは、例えばベンギン・ブックスの声明であろう。「ブックセラー」誌二月一七日付けは、ホメイニの「死刑宣言」を「大量殺人教唆」

と見なしているが、ここに引用された出版社の弁明をみると、『悪魔の詩篇』を潰神と信じた人々の苦悩は遺憾に思うが、これは世界的に先端を行く作家の手になる「虚構」であって、冒瀆ではなく、しかも英米でたかく評価されたのみならず、イスラーム教圏でも支持されたものである、うんぬんとあり、ここで「表現の自由は民主主義の要石」という紋切型が、その根拠を改めて問直されることもなく、いわば絶対に譲歩できない、西欧側の聖域として登場してくる。

アメリカ合衆国での一般発売開始となった二二日には、作家連合がニューヨークで集会をひらき、国連イラン代表部に書簡を手渡そうとして不首尾に終る。文中には、「アヤトラ・ホメイニたちがルシユデイの本の回収を試みているが、これは、アメリカ国民にとって不愉快このうえなく、またさらに大切なことだが、これは、われわれの権利に対する侵害である」等とあり、自由の守護者アメリカが、イランの「国際テロリズム」と対決するという旗色も鮮明である。

同日スーザン・ソングを会長とするアメリカ・ペンクラブなどの主催で、サルマーン・ルシユデイの連帯を表明する公開朗読会が催され、二二名の代表的作家が壇に上った。ソングは、脅迫に屈しないと、市民としての不屈の精神を訴え、ノーマン・メイラーは、もしルシユデイが殺害されるようなことがあれば、その同じ狂気は我々作家すべてを殺すことになる、と述べ、作家としての連帯を訴える。また執筆ギルド会

長のロバート・K・マッシーは、ルシュディの本を回収した書籍販売チェーン店からは、自分たちの本の扱いも断わろうと発言して、熱狂的な喝采を得たという。さらには、冒瀆こそが我を中世の神権政治から解放したのだ、大文字の言葉(聖典)が小文字の言葉(文学)を迫害するなかで、我々は文学と想像力と心との防衛のため、容赦ない態度で臨まねばならぬ、こと寛容に関しては教条的にならねばならぬ、という、『ニュー・レバブリック』編集者、レオン・ウィゼルトアイアの声もあつた。二一日のブッシュ大統領の声明に対する批判も多く、これでは、アメリカの憲法が保障する権利を守ることはならないとして、現政権のおよび腰を卓怯とまで非難する弁者もあつた、という。

いくら「死刑宣告」が「違法」であるからといって、多くのイスラーム教徒にとって冒瀆的と感じられる本を、「アメリカの人権」の名のもとに、是が非でも出版させようとする示威行動は、それだけでも挑発的で、いささか「危険思想」の傾きがある、と指摘したのはジョン・レオだつた(『USニュース&ワールド・リポート』誌三月六日)。とりわけ論理の飛躍も明らかなのが、リンドン・ジョンソンの伝記作者ロバート・A・カローの場合だつた様子で、彼は、「アメリカの利益を侵害するようないかなる行為にたいしてもイラン政府は責任を負うことになりうる」との大統領演説をうけ、「だが表現の自由が犯されたとなると、すでにアメリカの権益が攻撃にさらされているとは言えないか」「我々には読みたいものを読む権利がある」などとやつて、

(これは)我々の感情にいかにか少しの配慮しか寄せられていないかをものがたる証拠と言ふ他ない」と、西欧側の「自由」絶対視の暴力性を訴えた。

だが、その暴力に反対する姿勢そのものが、「自由社会」に対する暴力と映る。『インターナショナル・ヘラルド・トリビュン』紙(二月二日)で、クリストファー・ヒッチェンスはこう主張する。「殺害命令というこの直接攻撃にたいする自由社会の応答は、いったい篤信者たちの感情を害したことにばかりかかざらわつていて、表現と公開の自由という絶対の権利については、あまりにわずかの配慮しかはらっていない。ほかの絶対主義ならいざしらず、こればかりはへ絶対でありうる主題だし、またそうでなければならぬ」。うんぬん。だが、絶対視された自由とはまたなんと不自由な選択であることか。

暗殺の犯罪性を告発すること、言論の自由を守ることとは、本来別々の問題だつたはずである。しかし両者が、超法規的な脅威の前にして癒着してしまつたために、短絡的な過剰反応の結果する。出版の自粛といった現実的な妥協ないし配慮は、それだけで脅迫に対する屈服として批判される。もつとも、イスラーム過激派にとっては、これは目論見以上の成果であつた。そもそも冒瀆の書が禁止されただけでも慶賀すべきことだつたのに、西欧側はそうした譲歩のかわりに、自らすすんでイスラームの敵の役割を理想的に演じる仕儀となつたからだ。言論の自由という大義は、もはや、西欧が取らざるを得ぬ対抗措置がいかに不自由なものとなつたかを示す象徴でしかない。実際、

自由

これはさすがに無神経にすぎたものか、会場から「それならおまえはテヘランを爆撃しろとも言うのか」とヤジが飛んだそうである。実際、ここにはカッターファイア大佐暗殺を目的としたトリポリ爆撃を正当化するのと同じ、報復の論理がちらついている(ついでながら、合衆国の力の論理が、いかに恣意的な正義感の発露であるかについては、べつにミシガン大学政治学教授、アリ・マズルイが、『ザ・ブラック・スカラー』二〇巻二号に、いささか論理構築に欠けるが、詳細で執拗な比較法学的分析を試みている)。

IV

聖域どうしの対立
さて、こうした西欧側の態度硬化を前にして、表現の自由と信仰の尊厳との間の板挟みになつたのが、「自由主義圏」内部に生活するイスラーム教徒の良心であつた。実際、宗教の名で国際法が侵害されるのは困るが、だからといって、言語の暴力が宗教の尊厳に抵触するのを、法の原則の名で正当化するのは、これは悪しき復讐ではないだろうか。

パリにあるアラブ連盟の代表者ハマード・エッシドは、「ルシュディがあのように攻撃されたのに、西洋の人たちがいきり立つのももつともで、私にとつてもその憤慨は他人事ではない。しかしながら、この本をフランスで出版せよといって、署名を集めるに至つては、これはイスラーム教徒に対する挑発行為をなすに等しいという他ない。(中略)もとよりホメイニとは対立した意見をもつ、フランスのイスラーム共同体にとっては、

柔軟性を失い、多様性を保証できない自由など、その名に値すまい。

この時点で、はや『悪魔の詩篇』は芸術作品であることを止め、「表現の自由」という大義の伝達手段に還元され、芸術という名の偶像崇拜の対象に矮小化されてしまつた。だが、この小説が実は反イスラーム・イデオロギーの宣伝装置でしかなく、たと見なす見解こそ、そもそも「敵」であるイラン側が、この本に貼ろうとしていた、当のレットテルではなかつたか。してみると、西欧側は自由の大義を持ち出すことで、かえつてイラン側の設定したゲームのテーブルに安易に座つてしまつたことになる。「こうして文学も人間性も空虚な象徴に還元されてしまつた、西欧の自由という意識の囚人であるとともに、イスラーム原理主義正統性の人質でもあるような象徴に」(ホミ・ブハブア、『ニュー・ステイツマン』誌三月号)。「いまや自由の大義はフェティッシュと化し、ルシュディはその殉教者たることを強いられた」(『ガーディアン』紙三月七日)。

こうして、『悪魔の詩篇』は消え去り、この小説についての虚構的言辭がひとり歩きを始める。人々はその仮面に踊らされ、素顔の何たるかを忘れる。だがマギー・ジェーも言うところ、そもそもこの小説の目論見は、現実の仮面を剥ぎ取ることにあつたはずである。暴露を事とする小説が仮面に墮し、虚構化される運命にあること、この皮肉なめぐり合わせこそ「鯨の外」で作家を待つていた奈落である。

EC 'risks playing into the hands of Iran's hardliners'

AYATOLLAH Khomeini was yesterday reported to have made his first public appearance since pronouncing the death sentence on Salman Rushdie a week ago, but he did not visit the apartment leased by his office on Sunday night that the sentence must stand.

By Harvey Morris and Safa Ghari

Widespread protests against the death sentence at a public audience in an assembly hall next to his home in north Tehran, the crowd broke into chants of "Allah-akbar, Khomeini akbar" (God is great, Khomeini is the leader). Tehran, which is the seat of the Islamic Republic, is the headquarters of the Islamic Revolution. The sentence was to mark the birthday of Imam Ali, the son-in-law of the Prophet and the first Imam of the Shia.

The meeting was addressed by Mehdi Karubi, who is the deputy speaker of parliament and a leading radical. He told the crowd: "World infidelity rears another head. The Islamic Republic is warring against Islam and spreading their poisonous writings around the world. The decree has been issued by the Islamic and Supreme Council and others who have been issued by the Islamic and Supreme Council and others who have no right to issue such a decree. The Islamic Republic will not allow such a decree to be published and entering it."

for the blasphemy against Islam would not be enough. President Khomeini's secretary arrived in Belgrade at the start of an eastern European tour.

The day before Khomeini pronounced the death sentence, Iranian Parliament said in an interview that he was likely to stand as a candidate in presidential elections later this year. President Khomeini is constitutionally barred from seeking a second term and there have been moves in parliament to amend the constitution to give the next president greater executive powers.

Part of Khomeini's political platform is the need to improve ties with the rest of the world and with western Europe in particular, following the end of the Iran-Iraq war. He has been quoted on several occasions since he was elected last year's international position during the conflict was damaged by its negative image.

An exiled leader of the Shia community in Europe, Ayatollah Mehdi Foruzan, last night urged EC countries not to take any further action against Iran. "Ayatollah Khomeini is accustomed to harsh Iranian relations with the Western nations," he said, "but he will have done exactly what the leadership want."

wards better relations with the West, have Khomeini's car and are at the forefront of the controversy over the Geneva Treaty. Mr Karubi was Ayatollah Khomeini's representative at the 1987 annual pilgrimage to Mecca during which 400 people, most of them Iranian, were shot to death between Iranian demonstrators and Saudi police.

Other radicals in the hierarchy close to Ayatollah Khomeini are the Islamic Revolution, the Information (Intelligence) Minister, Mohammad Poyshari and Mohammad Khatami, the revolutionary secretary and the spiritual remains of the students who occupied the US embassy in Tehran in November 1979.

The constitution of the pragmatic wing of the leadership in the Islamic Republic has been relatively modest. Both the parliamentarian speaker, Hojatoleslam Ali Akbar Rafsanjani, and his political ally, President Ali Khatami, voiced support for the Ayatollah's original intent.

Sai President Khomeini's secretary suggested that a gesture of repentance by Mr Rushdie might mean Khomeini's death. He was implicitly rewarded in Ayatollah Khomeini's statement on Sunday night, which said that repentance



Muslims throw rocks at police in Srinagar, India, during a protest against the Salman Rushdie fatwa.

自由の限界と宗教の尊厳
ところで、表現の自由は無条件に擁護されるべきだ、との主張が可能なこと自体アメリカ合衆国の特殊事情といつてよく、またさればこそ声高に主張された。実際、合衆国に、よりおおきく、単一的なイスラーム社会が存在していたならば、宗教的配慮から出版を自粛する動きがでたはずだ、との推測もある。たしかに、宗教の自由と言論の自由とを並んで謳った憲法修正第一条は、複合文化社会を生き抜く処世術として、有効な便法であることは認めよう。だが言論の自由に保証されて、もろもろの宗派の間に冒瀆的な言辞が公然と飛び交い、しかもそれらの宗派が共存している合衆国の現状を、誇るべき寛容のありかたとみる者もあれば(マリーズ・ラスヴェン)、反対にそれを、宗教の敗北を象徴する、恥ずべき妥協とみる者(ブラッドフォードのモスク評議委員、シャビール・アカタール)もあった。
イギリスの場合、労働党が積極的にイスラーム教徒に加担したのが注目された。こと英国国教会に関するかぎり、反動的として拒絶するでもあろう宗教行為なり価値を、今回、イスラーム教徒については容認すべきである、と主張したからである。現在キリスト教に關してのみ運用されている冒瀆罪を、イスラーム教にたいする侵害にも拡大して適用しようとする動議がブラッドフォードで提出されたのがその典型的なケースである。これは、アメリカ合衆国の「人種の坩堝」的な画一的同和政策とは一線を画し、文化的多様性を保証したうえでの相互寛容をめ

『インディペンデント』紙2月21日付より、写真はインドのイスラーム教徒の暴動。

ざした、一九六六年のロイ・ジェンキンスの規定に従ったものと考えられるが、今回の動議は、一種、後追いの対処療法でしかないのと同時に、原則論をかえって曖昧にしたことも否めない。
他方、イギリスの外相ジョフリー・ハウ卿も、三月二日、ルシュディの小説がイスラーム信徒をいぢじるしく傷つけるものであることを理解する、と述べるとともに、またこの本はイギリスのこともまるでヒトラー支配下のドイツのように描いており、侮辱されたのに関して、我々もイスラーム教徒と変わるところはない旨の、譲歩をみせる。もともとこの比喩は不正確であって、ルシュディ氏からは、勝手に事実を歪曲して人を傷つけるような審判を下すのはむしろ英国外務省自身ではないか、とやり返されもする。あえてそのような誇張まで辞さなかったのは、あくまで英国はルシュディ氏のスポンサーではないのだ、ということを示すために印象付けたかっただけとおぼしい。
「我々は、この本のスポンサーではない、我々がスポンサーを務めているのは言論と出版の自由である」と問題をすり替えるあたり、英国現実主義一流のレトリックとも評せようが、翌日サッチャー首相も同様の主旨の「理解」ある発言をして、懐柔に努める。英国外務省も、ルシュディ程度の作家の手になる本などで損失を蒙るほどイスラームは弱々しいものではない、とダメを押し、国内の鎮静化を計ったが、イラン側から具体的な譲歩を引き出すには至らない。かえって、作家を救う為に作品を糾弾するのでは本末転倒であって、この矛盾に、政府の文学にたいする無理解と軽視が露呈した、と批判する論者もあった。

1989年3月7日

(グラハム・スウィフト、『インディペンデント』紙三月七日)。
もつとも英国政府は、さんざんその王室を侮辱し、サッチャー政権を皮肉ったルシュディをわざわざ庇護してやって、そのうえ内外のイスラーム界からの攻撃に晒される、という損な役回りになった。だが、これこそ「自由」の尊厳にふさわしいつけというべきだろう。

自由の概念の相対性

無条件の言論の自由そのものが逆説的にも多様性を抹殺し、抑圧や差別を正当化する横暴となる可能性もある、との認識は、ユダヤ、カトリックさらにはプロテスタントを通じて、多くの完教界指導者から提出された。そのなかでも微妙な議論を見せたものとして、『インディペンデント』紙に二月二日に寄せた投書を取り上げよう。
イギリスでは害毒のある麻薬を販売することは禁じられている。また、個人への中傷も禁じられている。それに対して公衆にひろく害悪をなすような発言をしても罰せられることはなく、かえってそれで金儲けをする者がいる。だからといって我々は表現に対する検閲をおこなう権限を政府に与えていないし、またそうするわけにはゆかぬが、しかし我々には毒は毒だと証言することは許される。そこに、(政治や法律の限界の外で)宗教が自由にたいして留保せねばならない重い責任がある、というのが、おおよそ、その骨子である。ルシュディの著作を「毒」

と読んでしまえば、かなり露骨な宗教的権威復活論とも取れるが、純粋な論理操作として見る限り、ここには、自由に関する我々の常識に潜む陥穽が暴かれている。個人的次元の違法行為が、社会的次元に拡大すると、もはや違法とは認められなくなる片務性に、自由社会の背理のひとつが顔を覗かせているからである。

そもそも自由・世俗社会では、原則として、法律の保護を受けるのは個人に限られており、なんらかの教義が、それとして保護の対象となることはない。これに対応して、個人の権利にたいする攻撃は罪となるが、教義にたいする攻撃は犯罪を構成しない。反対に神権政治の社会にあっては、聖なるものの中で、自由が制限されるが、それは換言すれば、自由が聖なるものではない、という事実を端的に表わしたにすぎない。自由が仮に無制限なものであったならば、それは自由そのものが不可侵なもの、つまり聖域と混同された証拠である。聖域がなければ冒瀆も成立しない。したがって、自由の冒瀆という考えはそれ自体撞着した物言いであり、自由とは、何を侵犯と見なすかに相関してのみ定義される相対的概念にすぎず、冒瀆と競合関係をなす対概念ではない。

こうした省察によって、自由は神聖なる信仰であってはならず、不断の係争にさらされるべき概念であることを確認したマイケル・イグナティーフは、従って、英国における冒瀆罪は、個人でなくある特定の教義(キリスト教)のみ保護している点で、イスラーム側から指摘されたとおり、世俗立法のエートス

法律違反の烙印が押されてしまう……

ルシュディを「表現の自由」の象徴とみるのは自由であるが、それは、このような不公平を捨象する感覚麻痺に陥っている証なのである。自由の享受と宗教の尊厳とを和解不可能な原則として対立させる態度こそ、自由社会の原則に反する自己中心主義であって、それは最後には「敵側」であるはずの「原理主義」に特有な真理の独占という逆行的退行に逢着する。

オリエントではなんでも物議をかますが、何ひとつたじかかない。反対に西欧では何も物議をかまさない代わりに、何でもまかり通る、といったのはフィリップ・ロスだが、不寛容と無関心というこの両極は、ルシュディ事件を軸に野合を遂げ、ここに一切の行動規範が見直しを迫られることとなった。実際、ルシュディの小説を言い訳にして、世界的規模の大量殺人発生を

とは異質で不純な要素を含んでいるのみならず、法体系上でも首尾一貫に欠けた、神権政治時代の残滓であることを示した。合理法の支配する大陸や合衆国と違って、このような経験法の土壌を持つ英国ならばこそ、ルシュディ事件が境界例としての特異性を発現し得たのもあろうか。

失格者としての英雄

ムハンマドにたいする名誉棄損に訴えられるはずのない西欧社会で、イスラーム界にあれば、ムハンマドへの中傷と取られて当然の発言をし、そのうえでイスラーム界から加えられた人身攻撃に対しては、西欧の法の保護を享受するというルシュディの特権的地位に、なにかしら二枚舌的な感じがしさを感ずる向きもあろう。西欧の法体系を巧みに利用して、イスラーム世界を一方的に攻撃したとの印象を与えるその戦術を前にして、イスラーム教徒が「文化帝国主義」臭さを嗅ぎとったとしても不思議はない。イスラームの目から見て、はなはだ不面目な失格者であるルシュディが、逃亡先の西欧世界では自由を濫用したにもかかわらず、表現の自由を危機におとされた危険な機会主義者として蔑視されるどころか、かえって西欧の大義を担った作家として英雄視される。イスラームにとっては、外国人に対するテロルであるどころか、身内の恥をすすぐ宗教的義務であるはずの内部肅正に、西欧からとやかく言われる筋合いではないはずなのに、この自己防衛に、西欧側からことごとく

容認するのは許されぬ詭弁であろうが、他方ルシュディの自由濫用が無辜の死者を出したとしても、その責任をすべてルシュディ個人に帰せしむる訳にもゆかない。だが、ホメイニ師から死刑宣告をうけたからといって、それをもってルシュディの無罪証明とするのは論理の飛躍である。マス・メディアが複数の文化のうえを等しく覆う今日の多元社会において、言論の自由は、自ら責任を取ることのできない危険を、意図するとしなにかかわらず、第三者の身のうえに及ぼしかねない。その危険を暴くことで自ら裁かれたのがルシュディではなかったか。

自由という裏切り

今や明らかなように、自由の名に、冒瀆を擁護することも筋違いなら、冒瀆の名に、自由を糾弾するのも問題からの逸脱である。だがここに悪循環のあるのも否定できない。言葉の暴力が肉体的暴力よりも重い意味を持つ文化と、直接の暴力を鼓舞するものでないかぎり言論の自由が優先すると考える文化とでは、相互の寛容を保障する地平を設定すること自体が、相互の原則にとって受け入れがたい不寛容を構成する。ルシュディの著作はこの間隙を突いた。否むしろルシュディの知識人としての位置そのものが、この無法地帯にあったのであり、それゆえに彼は自己同一性を失うことに自ら(?)の多重人格の無根拠な根拠を据えた。

そもそもが亡命(ヒジュラ)の宗教であったイスラームから「亡命」した、ある故郷喪失者が、自ら「許されたい」と感

『東京新聞』3月2日付より。
宇野外相のイラン訪問に際して、日本が仲裁の役割を果たすことを期待されている、と報じる。

じているその逃亡体験を描くことで、逆説的(？)にも、移民仲間であったはずの他の故郷喪失者たちから疎外されるという、二重の呪い。絶対精神の失われた時代の魂の放浪を描いたこの「精神現象学」が、たんに折り合わない諸々の文化のごたませについて語ったにとどまらず、まさにごたませそのものとして、「異種の「ゲームの規則」間の臨界を縦横に攪乱し、もって「侵犯の変節」を具現した由縁である。

「この「ゲームの規則」間の臨界を縦横に攪乱し、もって「侵犯の変節」を具現した由縁である。」

ルシュデイの文学を規定して、「自分を養子として受け入れてくれた文化にたいして、捧げ物として自分自身の身を切り刻んで犠牲として差し出すたぐいの、故郷喪失者の自傷文学」と述べたのは、先述のハマーディ・エッシュドであった『ル・モンド・ディプロマティック』(紙六月号)。他方、その著書『オリエンタリズム』で、西欧文化によるオリエンタ表象の政治性を糾弾した、パルステイナ知識人エドワード・サイードも、上記のペン・クラブでの発言において、ここにルシュデイ問題の中核を見た。イスラーム教徒の作家が西欧に住み、そして西欧のためにイスラーム世界を見当違いでしかも、宗教的見地からして冒瀆的と言わざるを得ぬやり方で描いたものだから、その倒錯的自虐症の驕傲さにイスラーム教徒は驚倒したのだという。



アメリカ「U. S. ニュース & ワールド・リポート」誌3月6日号より。「イランはいかにテロを行なうのか」という特集を組み、世界中にはりめぐらされたネットワークがあると報じる。

で、イスラーム教徒ではない自分としては、イスラーム教徒が冒瀆を感じるのが妥当か否かを判断すべき立場にはなく、あくまでも大多数のイスラーム教徒が侮辱を受けた以上、そのことを事実として最優先するところから出発せねばならないと、他者への思いやりある謙虚な態度を示している。

こうした判断主体と対象との距離意識に欠けているのが、例えばアンソニー・バージェスであって、彼は、キリスト教徒がえがいた「人間主義」的なイスラーム像のなかには、ルシュデイの本よりはるかに悪質な戯画があるだろう、と同じ新聞に書いている。この比較は二重の意味で空しい。まず、異教徒なり教典の民(ユダヤ教徒およびキリスト教徒)なりが、その教義に従ってイスラームを批判することは、イスラーム共同体の法には抵触しないから、イスラーム教徒としては、これに口出しすべき立場にはない。

この片務的寛容について触れるかわりに、アシュフォードはつづけて、ハロルド・ピントラー、反サッチャー政権派の作家たちが率いたルシュデイ擁護キャンペーンに保留をつけて、こう述べている。もしピントラーが善玉扱ひされた小説で、作者が攻撃された場合、果してピントラーたちは同じ行動をとったのだろうか、と。これではあまりにも手前勝手なえこひいきではないのか。正義の使者のごとくふるまうときに、ひとはすでに他者の尊厳を踏みこじる教条主義にとらわれている。ルシュデイ事件が秘かな反イスラーム感情に裏打ちされていることが、こう

21 910222 1
423-1

育った移民知識人の命運がかかえこんだ逆説をみる。その上でサイードは、複合性をそのものとして批判的に受け入れるためにも、民主的自由は擁護されねばならぬと主張する。いったい宗教的異議申し立てが禁じられている文化的文脈の外に身を置かなければ、件の宗教の一枚岩的な無謬性を疑問に付すこともできないが、その時、件の「疑問」はすでに一個の異端宣言に化している。この背理に身を挺してまで、自由の擁護を訴えるのは、それ自体一種のアメリカ自由主義に内属した物言いであるが、ここに、アラファトの側近として、「パルステイナ人」の主張を「国際社会」に主張するスポークスマンの立場にあるサイードの、すぐれて「政治的」な選択のあることを見落としてはなるまい。

矛盾としての寛容

自己の権益を擁護することが敵に身を売る裏切りに通ずる。ルシュデイのみならずサイード自身が具現しているこのジレンマは解消され得ない。が、解消が不可能なればこそ、この矛盾が相互の寛容の余地としても機能する。そのノーベル賞授賞に毀誉褒貶ないわけでもないエジプトの作家、ナギーブ・マフフーズは、極派が自分の都合で手前勝手に音楽でもなんでも冒瀆的であるとして処罰したのでは歯止めが効かないと警告しているが、これはイスラーム信徒にふさわしい慎重として傾聴に値する。これと相補う慎みをみせるのが『インディペンデント』紙(二月一八日)にコメントを寄せたニコラス・アッシュフォード

して一見「良識派」の行動様式のなかにまで、あられもなく露呈している。

人種差別的反応

ルシュディが表現の自由を象徴すると考えるのが、悪しき「物象化」であったなら、ホメイニをしてイスラームの代表とみなすのも、いうまでもなく極端な拡大解釈である。それでは、中世の異端審問官にキリスト教を代表させるようなものだ、といったのは二月二二日の集会でのフランスス・フィッツジェラルドだが、こうした比較をすると、今度は、イスラームが中世の遺物で野蛮、不寛容、狂信の代名詞であるとするがごとき昔からの偏見が頭をもたげる。実際、メディアはこの大衆心理学に沿って暴走をはじめ、反イスラーム・キャンペーンが実体化した。この二二日には、すでにロンドンで、爆弾騒ぎが発生したが、その目標は書店でも出版社でもなく、イスラーム文化センターを擁したモスクだったのである。

イスラーム排斥を正論とする典型的な論評の一例を、フランスの『ル・ポワン』誌のジャン・フランソワ・ルヴェル筆「不寛容、今イスラームを問う」(三月二三日)に見ることが出来る。アッシュフォードとは正反對に、ルヴェルに言わせれば、イスラーム教徒が、自分たちの宗教にとって攻撃的であると判断したテキストに憤慨する権利があるかないかは問題ではない。暴力的にその出版を妨害するとか、その著者を殺害することがな

「はたしてフランスのような世俗の社会がイスラーム教をその特性において受け入れる能力をもっているのか、そしてイスラーム教徒たちにとって、その信仰生活を、人間の尊厳と敬意とに基礎を置く西欧社会に同化させることが可能なかどうか、それが主要なるふたつの問題である」(アンリ・タンク、「ル・モンド」紙三月二〇日)。だが、その底にわだかまっているのは、今日の社会において宗教はいかにあるべきか、ないしありうるか、との問である。

VI

寛容の跛行性

神の思召し給うところが、憐れみと慈悲であればこそ、その意志に従うことは、おおいなる徳といえる。だが、たとえルシュディのような作家が相手であっても、その著作の動機を、なにがしかの同情をもってとにかく理解しようとする試みは、厭うのではありません。そこに憐れみの情があると言えようか。宗教上の寛容とはまず、自分とは異なった信仰に寛容を示すことではないのか。法律上の権利を厳格に強要することを差し控える用意もない慈悲などなるか。こうした言葉で、イギリスにおけるイスラーム教徒の反ルシュディ旋風に苦言を呈したのは、キングズ・カレッジの宗教学・宗教歴史教授、ケイス・ワードであった(『インディペンデント』紙二月一八日)。

もっとも、イスラーム側にいわせれば、自分たちは異教徒には寛容であって、ルシュディを許せないのは彼が恥すべきイス

いと保証のなきがかり、イスラームの権利問題など我々の関心を引くものではない、という。イスラームは文化、道徳、法律いずれにおいてもまだ現代社会の一員とは言えぬ遅滞を露わにしており、おまけに深刻な移民問題を起こし、しかも国家機構による国際テロリズムの九割がたはイスラームの犯行である、などなど、この発言の裏に、一部過激派をしてイスラーム全体を代表させようという国民戦線のイデオロギーそのままの外国人排斥のレトリックが、堂々とまかり通っていることを確認するとどめよう。

こうした過剰反応に元来より最も神経質だったのが、フランスを旧宗主国とし、そこに多くの移民人口をかかえる、マダガスカル諸国であったのも不思議でない。二月二三日発売の『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』誌に充実した記事を寄せたジョゼット・アリアは、マラケシュに集った、モロッコ、アルジェリア、チュニジア、リビアが、先週その共同憲章のなかで、イスラーム圏としてははじめて、人権の擁護を唱ったことに希望を託しつつ、筆を擱いている。だが、この指摘は、筆者の意図とは逆に、いかにイスラームが、神を前にした人間の責任に重きを置き、西欧近代の人権思想に抵抗してきたかを、改めて想起させる。西欧では当然とみなされている「世界人権宣言」も、人を人たらしめている神の存在を前提としないがかり、イスラーム教徒にとっては、原理的に受け入れ難い蛮則だったのである。

「ラーム」である」からだ。また、飲酒を認可しておいて、酔っぱらい運転を取り締まるのは、本末転倒であって、最初から禁酒を命じて人間を守るのが神の慈悲だ、と考えるイスラームの感覚に照らせば、イスラームは寛容の何かを学ばねばならぬと説教をするワードのこうした指摘も、西欧知識人の傲慢のひとつの見本でしかないかもしれない。

実際、ワードの立論の裏には、キリスト教の方がイスラームに優越するとの前提が見えかくれする。『クールアン』はたしかにイエスを預言者のひとりとしてアブラハムなどと同列に敬いはするが、イエスは十字架についてキリストとなったわけではない、とする『クールアン』の叙述(一五七章四節)は、キリスト教徒が救い主、つまり神と見なす位格に対する、最大の侮辱であることはまちがいない。それなのに、イスラーム教徒たちはといえは、所詮は人間でしかないひとりの預言者に対する侮蔑が、一人の人間の命にかかわる、と判断する。これはいかにも釣り合ぬ話ではないか、とワードは考える。同じ理屈で行けば、人ならぬイエスを侮辱されたキリスト教徒はイスラーム教徒を皆殺しにしても、文句はいえないではないか、というわけである。

ではなぜ、キリスト教徒は、自分たちがイスラームから蒙っているこの冒瀆に対し、アヤトラのように義憤をたたくことを許されてはいないのか(この問自体、アヤトラが義憤をたたくつる相手がキリスト教徒ではなく「身内のならず者」である以上、ルシュディ告発の理由にたいする曲解であるが、繰り返さない)。それ

は、救い主その人が、冒瀆の罪を着てみずから死を受け入れたからだ、と答えるのは、先に登場したニュービギン牧師である。今日イギリスのキリスト教徒は、冒瀆されても沈黙を守っているが、果してそれが自分たちの信仰の意味を知っていることなのか、それとも無知ゆえであるのかは、ただ神のみぞ知り給うことである、と同牧師は、結んでいる。その慎みにもかかわらず、ここで犠牲の精神が強者の論理へと転換するところを見落とすまい。そしてそれとちよほど並行したすり替えが、イスラーム側にもある。他者への「寛容」が自己本意なイスラーム共同体(ウンマ)定義と背中合わせに機能している事態である。

原理主義の連帯

さて、キリスト教国でも、周知のように近年、原理主義的な揺り返しとみに顕著である。フランスでは、スコセッシの映画『キリスト最後の誘惑』を巡る一件で、映画館の焼討ちさわぎが発生し、巻添えで死者まで出した。そのフランスで、イスラームはカトリックについて第二の宗教人口を形成する。結局自由主義圏では上映禁止にはならなかったこの映画が、イスラーム圏では上映禁止になったことを、パリに本部を置くアラブ連盟代表のハマーディ・エッシド(前出)が、フランス公衆に向けて喚起したのも不思議ではない。イスラーム側のキリスト教にたいする配慮に見合う配慮が、当然ルシュエディ事件に際して、キリスト教国でもイスラームに対して払われてしかるべきではないか、とフランスにおける社会的不公平の是正を訴えた

の指導者(実際にはアルジェリア寄り)で五月に死去は「宗教の聖性を犯す行為にたいして」あらためて毅然たる弾効をくわえた。

既にスコセッシの映画をめぐる言動で物議をかもしつたドゥクルト枢機卿にたいしては、今回も非公式ながら、「信者であるからといって、しかるべき表現の仕方を他者に向かって強要することはできない」、「宗教的権威で社会に向かって善悪の判断を押し付けようとする十字軍の精神」には賛同できない、などの反対意見が、教会内部やプロテスタント界からも表明された。

他方、カトリック復古主義者の側からは、「マホメットを擁護するのと我らが主の擁護とを同日に断じるこそ、おそるべき醜聞だ、なぜと言って、まずイスラームは悪魔の宗教であるし、つぎにマホメットが売春宿に通ったことは、歴史上の事実であるから」といった、極論の存在したことも、原理主義者の名譽のためにつけ加えておく必要がある。そういえば、復古主義運動の思想的中心人物リュスティジェル枢機卿は、『キリスト最後の誘惑』が放火事件を起こした折に、こう語って教会の責任を回避していた。「嵐を引き起こしたのは我々ではない。いっておいたはずだ、注意せよ、と。嵐が起るだろう、汝らは非合理なる力のいましめを解こうとしているのだ、と。聖なるものを尊重しなければ、悪魔が鎖を解かれることになる、と。」

わけである。立場上、アラブ連盟は、スコセッシの映画を糾弾するカトリック右派との精神的連帯の可能性を打診したかたちとなつて、カトリック側もルシュエディ事件に関する見解を提出せずにはいられなくなる。また言論の自由を絶対視する論者たちからは、カトリック、イスラームさらにはユダヤ教にまで広がる宗教界の、言論統制再導入をめざす動きにたいして、批判的論評が展開されることとなった。

英国国教会では、カンタベリー大主教ロバート・ランシー師が、二月二〇日、キリスト教徒の信仰に侮辱が加えられてはならぬのと同様、他の宗教の信仰も尊重されねばならぬ、という「前例」を見ない宣言を発する。これも、レバノンに自分の特使であるテリー・ウエイトが拉致されているという事情にわえて、先に触れた労働党の動議や宗教的寛容について教会内部の議論とも連動する政治的判断であろう。この点、今手元に資料がなく詳らかにしないが、保守党がルシュエディ擁護に回っただけに興味深い構図である。

フランス・カトリック界では、リヨンの司教座にある、ドゥクルト枢機卿が、二月二二日のコミュニケーションで、二つのスキヤンダルとともに「信者たちの信仰を侮辱した」ものと規定して、イスラーム教徒との連帯を印象付ける。これは先の映画をめぐるスキヤンダルの際に、パリ大モスクの責任者であったシエイク・アッパースが、「傷つけられたキリスト教徒」に示した共感に答えたものでもあった。このフランス・イスラーム界

悪としての聖

みずから操作した世論の反応を「悪魔」の名のもとに弾効して、自己正当化を計るのが、復古主義者の常である、と諦念をこめて語ったのが、マグレブ系ユダヤ知識人、アルベール・メソニミである(『ル・モンド・ディプロマティック』紙三月号)。「気をつけねばならない。〈聖〉なる観念を認めると、すぐ次につづくのが冒瀆という観念であり、それがひきつれてくるのが、まず強制であり、次には攻撃ということになる。これはもう、どうにもならない。『復古主義』とはつまり、とりあえずは象徴的に、他者なるものを殺害する思想なのである」、とりあえず、つまり他者の肉体的な存在を消滅させるまでの間は、という含意が、無論そこにある。

宗教権力の問題を批判的に考察したものととして、『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』誌(一九八九年四三三号)がある。そこで、ジャック・ジュイヤールは、「本当の冒瀆者とは神の名を語って、自分たちの意志を押し付けようとする者たちである」と確認し、こうした政治による宗教の「のっとり」こそ、「原理主義」の本質であるとする。ドストエフスキーが示したとおり、自由の重荷は軛の鎖よりも重いかも知れぬ。大審問官が捕らわれのイエスを非難したのは、イエスがひとびとには自由の重荷に耐える能力があるなどと信じたからであった。それでは民衆は不幸になる。聖職者たちの口を通してのみ神の権威を行きわたらせれば、民衆は懷疑を知ることもなく幸福である

う、というわけだ。だが、神を取るか、神を恥ずかせるか、神を人か口にしないで、神が本当に傷つく主張する者たちが、はたしてどこまでその神を信じているものか。また、神はその意志を遂行するに足る権能をこの世では持っていないから、自分たちで神の代理人たろうとする、というのは、神に仕えるふりをして神の威を借り、神を巻き込んで、利用することではないか。

かくして—あまりに明晰な逆説ではあるが—まことの犯罪人とは、ほかでもない「正統派」権威を樹立しようと企てる輩である、とまで旗色鮮明な反正統派宣言を辞さなかったのは、ルーマニア出身の亡命知識人シオランである。もう今を去ること四〇年前の『崩壊概論』にあるこれらの洞察を、今回の「出来事」への省察として掲載することに同意したこの賢者の主張は一貫したものだ。つまり、聖なるものへの熱狂や、真理を追い求める渴望こそが失墜なのであり、そうと悟ったならば、役立たずの懐疑的叡知に信を寄せるいささかペシミスティックな諦念に帰着するのがよろしかろう、と言っているのである。殉教者面をした暴君など、シオランの目には怪物としか映らない。

無知の幸福よりは知による不幸を甘んじて引き受けようとするシオランの覚悟は、もとより懷疑主義こそイスラームの敵とみなすアヤトラ・ホメイニの認めるところではない。一九八四年一月二日の説教の抜粋がジャン・ダニエルの論説に引用されていて、対立点を明確にしてくれる。まづろわぬ者どもの道徳的苦しみは、むしろ殺してやることで、早めに断ち切つて

やるべし、というのがイスラームの教えるところであって、かくして殺された者は、来世ではむしろ神の律がこの世に行なわれたことに感謝するであろう、とするのがアヤトラ・ホメイニの持論なのである。この世よりもシャリアをはるかに重視するイスラームの長に、現世の道徳や国際法など説いて聞かせたところで、もとよりせんかたなき由縁である（このホメイニ師の極端な戯画をすでにルシュディ自身がみごとに描きあげていたことは、由良君美氏がつとに『國文學』七二号に指摘されている）。

ニヒリズムの逆説

ここに問われるのは、決して世間でいわれるような、光と闇の抗争ではない。大悪魔アメリカにたいするイスラームの聖戦でも、迷信に対する科学の勝利でも、宗教権力に対する世俗権力の闘争でもない。よし宗教的真理にせよ、啓蒙的理性にせよ、およそ普遍的・絶対的に妥当する理法などと言うものが、その神通力を失い、真理という言葉が意味を失おうとしている兆候こそ、東西の価値観の対立といった安直な紋切型の裏に、この事件が開示している闇である。結局当事者となった政府責任者たちの行動を導いたのは、ほかでもない経済学上の生産性と営利性という打算であって、この市場原理と国際的経済競争の前に、道徳的良心と政治的良心とは、屈辱的な敗北をとげたのではないか。この敗北こそ我々の弱さであり、絶対なる真理の死、つまりは「神の死」と呼ばれる事態なのである。そう訴える、ミハエル・テレステンコは、その省察をこう結んでい

る。「おそらく、本質的に言って、このニヒリズムこそ、イマーム・ホメイニが、殺害に訴えることによつて、痛ましくも明るみに出したものの正体なのであって、我々がよく省察を巡らすべきところなのである」(『ル・モンド・ディプロマティック』紙六月号)。「信仰なきところには冒瀆はない」(ルシュディ)。だが、聖なるものを失った西欧社会が、かえって自由であることの罪障感にさいなまれたとすれば、「自由」なるものは、畢竟内に巢食ったニヒリズムを糊塗するための虚勢のレトリックとも見える。たしかに信仰という超自我は「自己」なるものの理解を抑圧する機構ではあろう。しかし、悪しき宗教的確信と良き「文化の不安」との接点に火花を散らした小説の作者が、前代未聞の法難に遭遇したわけだから、はたして「人間とは無益な受難である」のか否かという問いは、ここでメビウスの帯よろしく循環する。「自己」肯定は受難という「自己」否定によつてしかその根拠を得ず、そのときそれはもはや「無益」で感なくなくなってしまうからである。

追記
編集部からの要請で、この事件に関する、新聞、雑誌記事の要覧のごときものを編むこととなった。が、論点を整理してゆくうちに、目標をそれ、結果的には、距離を保った抜き書きの総括のようなものを、器用にまとめることは不可能になった。また反対に、筆者個人の意見を掘り下げること、執筆段階で入手できた資料の性質からいって、不十分にしかできていない。クロナクルとも論考ともつかぬ鶏的な作文となった次第で、この点をまず、読者ならびに編集部に対してお詫び申しあげる。また、本件のプレス・クリック・ハンク集成の『The Rushdie File, edited by Lisa Appignanesi and

Sara Maitland, 1989, は脱稿後にはじめて、編集部的好意で通読できた。本来ならば、これに沿って、全面的に改稿すべきところであるが、もはやその余裕がなく、若干の補正を加えるにとどまった。執筆状況に関して、いささかご説明申し上げ、訂正すべき多々の誤解、欠落について、識者の叱正を待つ次第である。

また、これも編集部のお婆心に甘えて、言い訳めいた繰り返言をいれるが、ここにはなほ不完全ながら試みたのは、あくまでも「言論の自由」についての言表にたいするメタな論評であって、「言論の自由」にたいする批判ではない。「一見「言論の自由」によつて保証されるかと妄想される、同一の水準にたつた論争というものが、実はある暴力性を暗黙の前提としなければ可能でないことは、今日既に常識に属するのではないか。フーコーはいわずもがな、すでにリオターールやブルデューによつて執拗に論じられてきたこのアポリアが、「悪魔の詩篇」事件によつてあらためて暴露されたことのみ、ここにことあらためて蒸し返さねばならぬのは徒勞感を覚えるが、その先に論をすすめるには、場所を改める必要があることも、いまさら断わるまでもない蛇足である。

なお、ペルシア語、アラビア語の表記に関しては、杉田英明氏の指導を仰いだ。だが、表記の統一に不備のある点は、著者一個の責任である。(いながしけみ/比較文学・比較文化)

ユリイカ 12月号

予価九八〇円

特集*アーヴィング

アーヴィング最新作「オーエン・ミーニーのための祈り」

〈ベストセラーだった何なんだ?〉

〈豚男スニードを救おうとして——ライターの仕事〉

川本三郎・青山南・伊藤俊治・柴田元幸・畑中佳樹・斎藤英治

中野圭二・荒このみ・佐藤宏子・今村橋夫・米塚真治